

『サーダナ・マーラー』 No.206 「五護陀羅尼成就法」について

文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程3年
園田沙弥佳

『サーダナ・マーラー』 *Sādhnamālā* (SM) は、11～12世紀頃にアバヤーカラグプタ Abhayākara Guptaによって編纂されたインド密教の成就法儀軌である。

SMに収録されている五護陀羅尼の成就法は全部で9種ある。本論文では五護陀羅尼の各明妃が一括されて説かれているNo.206「五護陀羅尼成就法」を取り上げ、和訳を試みた。

No.206は他の五護陀羅尼の成就法と比べるとその内容は特に詳細なものであり、前半部において行者と尊格が合一し、後半部において改めて行者がすべての衆生の利益のためにマンダラを描く。「抜苦与楽」「四梵住」「五識」「三毒」「蘊界処」等といった仏教的な概念が多く説かれ、五護陀羅尼各明妃の体色や持物、種字等の図像的特徴や功德等について述べられていることが和訳を通して明らかになった。特に功德については息災や増益等、様々な現世利益的な効能が強調されている。

キーワード：

インド密教、『成就法の花環』、五護陀羅尼、パンチャラクシャー

1. はじめに

アバヤーカラグプタAbhayākaraguptaによって11～12世紀頃に編纂された¹インド密教の成就法儀軌である『サーダナ・マーラー』*Sādhanamālā* (略号SM) には、312種の成就法儀軌が集められている。

SMの先行研究としては、バッタチャリヤBhattacharyaのテキスト校訂本の他、佐久間留理子氏、頼富本宏氏、立川武蔵氏、下泉全暁氏、清水乞氏、森雅秀氏、吉崎一美氏、山口しのぶ氏等の研究がある。SM、『ニシュパンナヨーガーヴァリー』*Niṣpannāyogāvalī* (略号NPY) を校訂したバッタチャリヤ [1968b] は上記文献に含まれる諸尊の図像的特徴を詳細に述べ、密教図像学の基本的なものとして知られている。吉崎一美氏 [1980] はSMのバッタチャリヤ校訂本とサンスクリット写本4本（東京大学所蔵）、チベット写本3本（北京版）の比較対照を行った。また、頼富本宏氏・下泉全暁氏 [1994] によってNo.98「ターラー成就法」、山口しのぶ氏 [1997] によってNo.251「サンヴァラの七字真言」、奥山直司氏 [2005] によってNo.217「ヴァジュラヴァーラーヒー成就法」の和訳がなされている。さらに、佐久間留理子氏 [2011] によってNo.6～20、22、23等の観自在の成就法が取り上げられ、詳細なサンスクリット・テキスト校訂が行われている。

「五護陀羅尼」とは、『大随求陀羅尼』*Mahāpratisarā*、『守護大千国土経』*Mahāsāhasrapramardanī*、『大孔雀陀羅尼』*Mahāmāyūrī*、『大寒林陀羅尼』*Mahāśītavātī*、『大護明陀羅尼』*Mahāmantrānusāriṇī*の5種の陀羅尼経典を指す。これらの陀羅尼経典は後に、マハープラティサラ明妃 (Mahāpratisarā 大随求明妃)、マハーサーハスラプラマルダニー明妃 (Mahāsāhasrapramardanī 守護大千国土明妃)、マハーマユーリー明妃 (Mahāmāyūrī 大孔雀明妃)、マハーシートヴァティー明妃 (Mahāśītavātī 大寒林明妃)、マハーマントラヌサーリニー明妃 (Mahāmantrānusāriṇī 大護明明妃) という5尊の女神としてそれぞれ神格化され、さらにその後、一つのグループとしての五護陀羅尼の成就法やマンダラが説かれるようになり、信仰の対象となった。(マハープラティサラ明妃の成就法については、[園田:2014]を参照)

『サーダナ・マーラー』に収録されている五護陀羅尼の成就法は全部で9種ある²。

以上の儀軌のうち、五護陀羅尼各明妃単独の成就法はNo.194～200の7種、また、5尊の明妃が一括される形で述べられている成就法はNo.201、206の2種がある。本論文では、五護陀羅尼のマンダラが説かれているNo.206を取り上げる

2. No.206「五護陀羅尼成就法」の内容構成

この成就法の内容は、五護陀羅尼マンダラの観想を中心に行う前半部と、実際のマンダラの制作及び供養を中心に行う後半部の2つの部分からなる。以下にNo.206の次第を挙げる。

No.206 「五護陀羅尼成就法」次第³

[1] 五護陀羅尼マンダラの観想

[1.1] 観想の準備

[1.1.1] 中尊マハープラティサラーへの帰依文

[1.1.2] 場の加持

[1.1.3] 供養と四梵住の観想

[1.1.4] 空性の観想

[1.2] マンダラの外郭および五尊の明妃の観想

[1.2.1] マンダラの外郭およびマハープラティサラー明妃の観想

[1.2.2] マハープラティサラー明妃の真言

[1.2.3] マハーサーハスラプラマルダニー明妃の観想

[1.2.4] マハーサーハスラプラマルダニー明妃の真言

[1.2.5] マハーマユーリー明妃の観想

[1.2.6] マハーマユーリー明妃の真言

[1.2.7] マハーマントラーヌサーリニー明妃の観想

[1.2.8] マハーマントラーヌサーリニー明妃の真言

[1.2.9] マハーシータヴァティー明妃の観想

[1.2.10] マハーシータヴァティー明妃の真言

[1.3] 三昧耶チャクラと智チャクラの観想と2つのマンダラの合一

[1.4] 身体各部における観想と女神の布置

[1.5] 真言の読誦

[2] マンダラの制作

[2.1] 五護陀羅尼マンダラを描く目的

[2.2] マンダラ制作

[2.2.1] マンダラの作壇と土地神を鎮める儀式

[2.2.2] 四方四維にいるガンダルヴァ等の供養

[2.3] マンダラの供養

[2.3.1] 密教行者の心構え

[2.3.2] 諸尊の観想

[2.3.3] 仏陀、諸尊等への帰依文

[2.3.4] 五護陀羅尼マンダラ諸尊の供養

[3] 五護陀羅尼の儀軌の効能

以上がこの成就法の次第である。以下に各次第の概要を述べよう。

[1] 五護陀羅尼マンダラの観想

[1.1] 観想の準備

まず観想の準備として、中尊マハープラティサラーへの帰依を行う。その後密教行者自身の口等を清めて座し、真言を唱えて座の守護の加持を行う。そして自身の心臓においてa字を月輪に変化させ、罪の懺悔、三宝帰依、発菩提心、回向等の行為を行った後に⁴、四梵住および空性を観想する。以上のような準備の後、五護陀羅尼マンダラの観想に入る。

[1.2] マンダラの外郭および五尊の明妃の観想

次に行者は、金剛籠、金剛境界、金剛天蓋、須弥山、楼閣⁵（大解脱の都）などのマンダラの外郭を観想した後に、praṃ字から変化したマハープラティサラー明妃を観想する。次に、東においてhūṃ字の印がある金剛から変化したマハーサーハスラプラマルダニー明妃、南においてmāṃ字の種字から変化したマハーマーユーリー明妃、西においてmaṃ字の種字から生じたマハーマントラーヌサーリニー明妃、北においてtrāṃ字の変化より生じたマハーシータヴァティー明妃を観想する（なお、各明妃の図像的特徴については表1参照）。

以上で中心となる5尊の明妃の観想が終わる。

[1.3] 三昧耶チャクラ（マンダラ）と智チャクラの観想と2つのマンダラの合一

以上のようなマンダラを観想し、その後行者は智チャクラを引き寄せて、自身の三昧耶チャクラに引き入れる。その後2つのマンダラが1つになるのを観想してから、自分自身が灌頂を受けているところを観想する。以上が三昧耶チャクラと智チャクラの観想と2つのマンダラの合一の場面であり、この成就法の核心的な部分である⁶。

[1.4] 身体各部における観想と女神の布置

続いて行者の両目に癡金剛女であるマハープラティサラー明妃、両耳に瞋金剛女であるマハーサーハスラプラマルダニー明妃、鼻に慳金剛女であるマハーマーユーリー明妃、口に貪金剛女であるマハーマントラーヌサーリニー明妃、触に嫉金剛女であるマハーシータヴァティー明妃を布置する⁷。

[1.5] 真言の読誦

五護陀羅尼マンダラと行者自身が合一した後、静まった心で途切れなく真言の読誦(japa)が行われる。以上で五護陀羅尼マンダラの観想が完了し、次に実際にマンダラを描く行為が述べられる。

[2] マンダラ制作と供養

[2.1] 五護陀羅尼マンダラを描く目的

まず「一切衆生の利益のために五護陀羅尼マンダラを描く」という目的が説かれる。この

儀軌の前半部において密教行者は五護陀羅尼マンダラと一体となった。ここから一切衆生たちの利益のために実際にマンダラを描き、供養等を行う。

[2.2] マンダラ制作

次に、白と赤の粉を用いて土地神を鎮める儀式が述べられた後、マンダラの周囲にいるガンダルヴァ等の供養をする。地には牛糞を塗り、栴檀の塗香で儀礼の場を清め、八葉蓮華を描く等といったマンダラの作壇を行う。

[2.3] マンダラの供養

その後、真言の唱え方や食物の規定等の密教行者の心構えが示され、再度諸尊を思い返して観想し、仏陀、諸尊等への帰依文が説かれる。そして諸尊の名前が添えられたドウルヴァ草とジャスミンを用い、真言を唱え、ヨーガを行うことによって、五護陀羅尼マンダラ諸尊の供養がおこなわれる。

[3] 五護陀羅尼の儀軌の効能

最後に、五護陀羅尼の成就法を行うことによって得られる効能について述べられる。

以上がNo.206五護陀羅尼成就法の内容構成である。

3. No.206の特色

No.206は五護陀羅尼の成就法について述べられているが、他の五護陀羅尼の成就法と比べると、その内容は特に詳細なものになっている。前半部においては行者が尊格と合一し、後半部においては尊格と合一した行者が実際にマンダラを描いた後に改めて供養を行う。このような構成は他の五護陀羅尼の成就法には見られず、No.206独特のものである。また、「抜苦与楽」「四梵住」「五識」「三毒」「蘊・界・処」等といった仏教的な概念が多く説かれていることや、五護陀羅尼各明妃の体色、持物、種字等の図像的特徴や功德等、様々な特徴があることが明らかになった。

これらの中でも特に五護陀羅尼の功德については多くの効能が説かれている。寿命の増益をはじめ、王権や王国、村落、家畜小屋、庭の入手、飢饉や干ばつといった自然災害からの守護、ヴァータ（風）、ピッタ（熱）、カパ（水）のトリ・ドーシャから生じたあらゆる病気の治癒、さらには他者に苦を与えるといった行為等についても記されている。ここで強調される様々な現世利益的な功德は、五護陀羅尼の各経典が持つ元来の性格が反映されているものと考えられる。

以下にこのNo.206の和訳を示す。

4. SM No.206 「五護陀羅尼成就法」和訳

SMに述べられている五護陀羅尼明妃のマンダラ成就法のうち、No.206「五護陀羅尼マン

「五護陀羅尼成就法」の和訳を行った。使用したテキスト、写本および略号は以下のとおりである。

[サンスクリット校訂テキスト]

A: Bhattacharya, Benoytosh, ed., *Sādhana-mālā* vol II, G.O.S. No.41, Baroda Oriental Institute, Baroda, 1968 (pp.405-413)

[サンスクリット写本]

B: 東京大学所蔵梵文写本松波目録No.451, *Sādhanasamuccaya* (153a6-158a2)

C: 東京大学所蔵梵文写本松波目録No.452, *Sādhanasamuccaya* (111a5-114a5)

D: 東京大学所蔵梵文写本松波目録No.453, *Sādhanasamuccaya* (159a1-164a4)

E: National Archives, Kathmandu, No.3-387 (168a6-172b6)

[チベット写本]

F: 西藏大蔵経北京版 (TTP) Ota.4418 (vol.81 p.39-41, 286b1-292a1)

〈No.206 「五護陀羅尼成就法」和訳〉

[1] 五護陀羅尼マンダラの観想

[1.1] 観想の準備

[1.1.1] 中尊マハープラティサラへの帰依文

聖なるマハープラティサラに帰依する。

[1.1.2] 場の加持

第一に、多くの真言行者は、口の浄化等をなしてから、精神が望ましい場所において安楽坐で坐してから、「オーム、アーハ、フム、守護せよ、守護せよ、フム、パット、スヴァーハー」と言って、[儀礼の] 場と自身を結び告げることによって⁸、守護の加持を行うべきである。

[1.1.3] 供養と四梵住の観想

その後、自身の心臓においてa字より生じた月輪を [観想し]、その上にpraṃ字⁹から [放たれる] 光線から出現させて、(中尊) マハープラティサラ明妃を筆頭とする一族 (五護陀羅尼に属する明妃) や眷属たちを伴った諸々の仏菩薩を眼前に見て供養するべきである。花、線香、灯明、塗香、バリ供物、食物等を奉献してから、罪を懺悔すべきである。三宝の庇護所に赴き、菩提心を生じさせるべきである。善根を回向した後に許しを乞うべきであり、その後四梵住を観想するべきである。

[その後、] その苦を除くことが悲であり楽を与えることが慈であり、堅固な幸福の本質によって喜があり、真如の姿の本質は捨である。

[1.1.4] 空性の観想

それから、一切法を心によって無分別であると考えた後に、「オーム、私は空性智金剛というものを本性とする者である」¹⁰ [と唱えるべきである]。

[1.2] マンダラの外郭および五尊の明妃の観想

[1.2.1] マンダラの外郭およびマハープラティサラール明妃の観想

その後hum字によって二重金剛でできた大地を加持すべきである。その金剛によって金剛籠、金剛境界、そして金剛天蓋を考えてから、その中央においてsum字が変化した須弥山を、様々な花に覆われた大解脱の都¹¹の住処を [観想する]。その上にhum字を二重金剛に、pum字 [を] 雄しべと雌しべをそなえた二重蓮華に変化させ、その上の月輪の中央においてpram字¹²の光線を拡散させるべきである。それら [の光線] によって五智の本質を引きつけてから、一切の如来達によって一つに集まり溶けた (一つになった) 種字の変化させ、これから言われる色をした、マハープラティサラール [を観想すべきである]。

[マハープラティサラールの体色] は白色¹³で、16才の姿で、頭頂は仏塔で飾られ [ている]。月輪の上にある日輪の上に乗る、金剛結跏趺坐に坐す。三眼、八臂で、ゆれる耳飾りが輝き、首飾りと足首の飾りに飾られ、金の臂釧を身に付け、[また、] 腰飾り、一切の装飾品を身に付けている。その女神の中央の顔は白、右は青黒色、後部は黄色、左は赤色である。

右の第一の臂において輪、第二臂において金剛杵、第三臂において矢、第四臂において剣を [持ち]、左の第一臂において金剛杵と絹索、第二臂において三叉戟、第三臂において弓、第四臂において斧を [持つ]。

菩提樹¹⁴によって飾られ、[また、] 様々な花¹⁵や果実などで飾られた [女神である]。梵天、ヴィシュヌ、大自在、歓喜自在等によって崇拜され、天、竜、夜叉、乾闥婆によって右側において崇拜されるべき [女神] で、帝釈、閻魔、ヴァルナ神、毘沙門天、阿修羅、迦桜羅、緊那羅、摩睺羅伽等の神々によって崇拜される。[また、] 貪・瞋・癡 (三毒) の習慣がついたところを絹索で真二つに切る女神である。

敵のマントラや印、毒薬を使用し、敵意と調伏の呪文、そして、邪悪な心を持つ者共を粉々に砕く女神である。

最上の供養に満足する一切の仏菩薩の聖なる一団を守護する女神で、大乘仏教の教理を書いたり読んだり読誦したり、自習、聴聞、憶持に集中した者たちを守護する女尊である。

[1.2.2] マハープラティサラール明妃の真言

このような存在である女尊を拡散収縮のヨーガ、すなわち尊敬を伴った絶え間ない実践によって [女神に] 頼って、その女尊 (マハープラティサラール明妃) の読誦のマントラ [を唱

えるべきである]。「オーム、宝珠を持つ女神よ、金剛女よ、マハープラティサラールよ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.2.3] マハーサーハスラプラマルダニー明妃の観想

そのマハープラティサラールの東の方角において、同様に、前のヨーガを行ってから、二重蓮華の中心において、hūm字の印がある金剛が変化したマハーサーハスラプラマルダニーを[観想すべきである]。

[マハーサーハスラプラマルダニーの体色は] 青黒色¹⁶で、黄褐色の髪を逆立てた女神で、人間の頭蓋骨で飾られ、眉を寄せて牙をむいている顔で、輝く日輪の座[の上]で遊戯坐に坐し、マハーブータとマハー夜叉を踏みつけている。金の腕輪に飾られ、首飾りと足首の飾りを身に着けている。

その右の第一臂によって与願印と金剛杵を、第二[臂]によって鉤針を、第三[臂]によって矢を、第四[臂]によって剣を[持ち]、左の第一臂によってタルジャーニー印と縄索を、第二[臂]によって斧を、第三[臂]によって弓を、第四[臂]によって蓮華の上の16の宝石を[持っている]。

その中央の顔が青黒、右が白、後部が黄色、左が緑[の顔の色]で、すべて[の顔]に三眼を[備えている]。

様々な宝石などの装飾された身体で、大きな力を持ち、[また、] エネルギーを持ち、獐猛な外観である。[また、] ヴァータ¹⁷の樹に飾られている。

七母神¹⁸などの女神たちを威嚇し、レーヴァティーなどの星宿や惑星を恐れさせ、ヴァースキ蛇王等の八大竜王¹⁹の恐ろしさを成す女神で、ヴァータ、ピッタ、シュレーシュマ(カバ)²⁰を浄化する女神で、獐猛な闇である(闇の)雲を引き裂く女神で、一切の突然死を防ぐ女神である。

[1.2.4] マハーサーハスラプラマルダニー明妃の真言

その女尊[マハーサーハスラプラマルダニー明妃]の読誦のマントラは[以下のようにある]。「オーム、最上の甘露の女神よ、最も良い最上の清浄な女神よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.2.5] マハーマーユリー明妃の観想

その後、マハープラティサラールの南方に存在する、二重蓮華の上で、月輪の中心において、mām字の種字から変化した、マハーマーユリーを直ちに[観想すべきである]。[マハーマーユリーの体色は] 黄色²¹で、日輪[の上]に乗って結跏趺坐で、三面三眼で、八臂で、宝石の宝冠をもつ女神で、一切の装飾品に飾られている。

その右の第一の臂によって与願印、第二によって宝石の水差し、第三によって輪を、第四によって剣を〔持ち〕、左の第一の臂によって乞食の鉢、第二によって孔雀の尾羽を、第三によって水差し上の二重金剛を、第四によって宝石の旗を〔持つ〕。

そして、中央の顔に黄色、右において青黒色、左において赤色〔をしている〕。

アショーカの樹²²によって飾られ、その傍らにある七毒²³によって覆う女尊で、その恐ろしい黄褐色（の髪）等や、女羅刹の邪悪な心を粉々に砕く女神である。

結合した蛇等の生贄に坐す女神で、天・竜・夜叉・乾闥婆たちによって、礼拝されるべき女神である。その27星宿や九曜²⁴等によって称賛されるべきもので、かの一切の無生物・生物の毒を食らうべき女神で、かの神と悪魔とアシュラと魅了される女神である。

[1.2.6] マハーマーユリー明妃の真言

その女神によって読誦のマントラ〔を読むべきである〕「オーム、甘露のごとき女神よ、胎を保護する女神よ、引き付ける女神よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.2.7] マハーマントラーヌサーリニー明妃の観想

そのプラティサラーの西の方角において、二重蓮華の上の月輪の中央においてmam字の種字の変化から生じたマハーマントラーヌサーリニーを観想するべきである。

〔マハーマントラーヌサーリニーの体色は〕白色²⁵で、十二臂で、三眼で、輝く日輪〔の上で〕展右の姿勢で〔坐す〕。宝冠を被り、一切の装飾品で輝き、新鮮な若さをもち、首飾りとくるぶしの飾りとイヤリングに飾られたシリーシュの樹²⁶で飾られている。

その第一の両臂によって転法輪印、第二の両臂によって禅定印、第三〔の右の臂〕によって与願印を、第四によって施無畏印を、第五によって金剛杵を、第六によって矢を、第三〔の左の臂〕によってタルジャーニ印と羂索を、第四によって弓を、第五によって宝石のついた傘²⁷を、第六によって蓮華のマークの水差し²⁸を〔持つ〕。

中央の顔を白、右を青黒、左を赤〔とする〕。

様々な花等で満たされ、その8名の護世神をはじめとする神々によって崇拜されるべきであり、伴っている四天王によって称賛され、持明者の列に礼拝されている。

[1.2.8] マハーマントラーヌサーリニー明妃の真言

その読誦のマントラ〔を読むべきである〕。「オーム、けがれのない女神よ、偉大な女神よ、甘露のごとき女神よ、金剛女よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.2.9] マハーシータヴァティー明妃の観想

そこで、マハープラティサラーの北の方角において、二重蓮華の上で、月輪の中央におい

て、trām字の変化より生じたマハーシータヴァティーがいる。[マハーシータヴァティーの体色は]は緑色²⁹で、日輪 [の上で] 展右の姿勢で乗り、三面三眼で、六臂で、如来の化仏をつけた宝冠を被り、一切の装飾品に飾られ、神々しい服を身につけている。

その第一の臂によって施無畏印を、第二 [の臂] によって金剛杵を、第三 [の臂] によって矢を [持ち]、左の第一の臂によってタルジャーニー印と絹索を、第二 [の臂] によって弓を、第三 [の臂] によって宝石の旗を [持つ]。

中央の顔は緑色で、右は白色、左は赤色である。

チャンパカの樹³⁰で飾られ、伴っているカーマ神をはじめとする神々に崇拜される。

ハーリーティ等の夜叉、女夜叉を破壊する女神で、カラスやふくろう、ハゲワシ、タカ、鳩等を追い払う女神で、かのブータ、プレータ（餓鬼）、ピシャーチャ（毘舍闍）ヴェータラ、羅刹等に魅了される女神で [ある]。

[1.2.10] マハーシータヴァティー明妃の真言

この読誦のマントラ [は以下のものである。]「オーム、支えよ、支えよ、集めよ、集めよ、感官の力を浄化する者よ、フム、フム、パット、パット、スヴァーハー」

[1.3] 三昧耶チャクラと智チャクラの観想と2つのマンダラの合一

以上のように示されたマンダラを観想して、その光線の集まりが遍満している [五尊の] 各々の文字から [さらに] 光線を放出し、その後それらの光線があまねく三界に広がり、そこにある文字に入り込む [を観想すべきである]。

再び、虚空の空間に拡散してから、智チャクラを引き寄せて称賛し、[智チャクラを] 引き寄せて、自身の三昧那チャクラに引き入れるべきである。その後2つ [のマンダラ] が1つにまとまったのを観想してから、そこから（複数の）光線によって、一切の如来を引き寄せて、崇拜してから、灌頂を請うべきである。自分自身が灌頂を受けているところを観想すべきである。

[1.4] 身体各部における観想と女神の布置

供養、称賛、甘露の献供を先に行ってから、[悟りで] 目が見える者（行者）は観想すべきである。両目において癡金剛女であるマハープラティサラ、両耳において瞋金剛女であるマハーサーハスラプラマルダニー、鼻において嫉妬金剛女であるマハーマーユリー、口において貪金剛女であるマハーマントラヌサーリニー、感触において嫉金剛女であるマハーシータヴァティー [を観想せよ]。このように、色、受、想、行、識の [五] 蘊、界、処の本質である浄化された女神たちが、特に知られるべきである。

[1.5] 真言の読誦

そこにおいて、まさに三昧耶 [チャクラ] となった後、この儀軌に従ってマントラを唱えるべきである。真言の文句を諸尊のヨーガ (観想) によって、尊格の名前とともに、静まった心で途切れなく読誦すべきである。

熱、洪水、病気、戦闘の時、全く同様に、
ダーキニー女神、死霊、川の氾濫、敵に苦しめられた時、
稲妻が光る雲の山や、森の中の二股の道で [迷った] 時、
それ故に、一切の恐れを破壊するマントラを常に思い起こすべきである。

[2] マンダラの制作

[2.1] 五護陀羅尼マンダラを描く目的

そこにおいて、次第は以下の通りである。

一切衆生の利益を目的とし、一切の衆生の利益を生む、
いかなる方法であっても長寿、繁栄の原因となるものであるゆえに、
私によって、吉祥なる道である五護陀羅尼の儀軌が記される。
そして衆生等の利益のためにマンダラが描かれる³¹。

[2.2] マンダラ制作の準備

[2.2.1] マンダラの作壇と土地神を鎮める儀式

牛糞が塗られ、天蓋によって覆われ、様々な布が吊り下げられた、
[そのような] 吉祥で好ましい清浄なる土地において [儀礼を行う]。
[儀礼の場に] 塗られている一切の塗香のうち、特に栴檀によって、
そして160アングラの長さを取って、マンダラを描くべきである。
白と赤の粉を用いて³²、土地神を鎮める儀式を行う。
雄しべと雌しべを備えた八弁の蓮華を描くべきである。

[2.2.2] 四方四維にいるガンダルヴァ等の供養

花輪と衣服で飾られ、傘と旗と花で覆われた
五つの瓶を安置して、
[そこに] 花、線香、塗香、バリ供物、食物をともなった
上に布を被せた法界 [に関する] 経典と、
特にドゥルヴァ草とクンダ³³が入った白い花を [供えて]、
四方四維において、儀軌にしたがって神々を供養すべきである。
特に粗糖、食物、白い花、ミルク粥 [を供え]、

ガンダルヴァに [以上の] バリ供物を与えた後に、東の場所に供えるべきである。
黒胡麻と酒に満たされ、魚と肉とたまねぎが入れられたバリ供物を、
クンバーンダ鬼たちに与えた後に、南の場所に供えるべきである。
特にミルク粥、ヨーグルト、牛乳を作り、
[以上の] 大きなバリ供物を蛇達に西の方角に供える [べきである]。
大豆、いんげん豆、クラッター豆、ジャーンプ、シードゥ酒を
北の方角に供え、夜叉たちに [以上の] バリ供物を与えるべきである。
北東の方角から始めて、あるいは通りの場所で
白、赤、緑の花輪が下がっており、
特に中央は種々の花でできた白色の花輪を
牛乳と血と器、また正に、サルジャラ樹と塗香を、
各々の供物に適切に供え水（閼伽水）を供えて、
得られるだけの果物と、ラッドゥー菓子とモーダカ菓子とシャシュクリ団子、
また以前言われたように、ピシュタカ菓子、特に、凝乳の欠片と、
南に八印³⁴で飾られたバリ供物を置いて [供養すべきである]。

[2.3] マンダラの供養

[2.3.1] 密教行者の心構え

そしてまた、

法を宣言する阿闍梨は業金剛（金剛のように堅固な業をなす者）であり、
沐浴し、清浄な衣服 [を身につけ]、穢れのない気持ちで坐した後、
常に宝冠を [被り] 東に顔を向けて坐し、[経典を] 読誦すべきである。
托鉢で生活している比丘達の清浄な戒律を受け入れるべきである。
施主と行者が³⁵、完全に浄化された [真言を] 唱えるべきである。
1回から21回、行うべきである。

[読誦の] 次第が不足であったり余計であったりした場合、正しい成就是
得られない。

堅固な勇氣によって悲と衆生の利益が生じるため、完成（成就）する。
それ故に、以前仏陀によって話された吉祥の為のマントラを為す（唱える）べきで
ある。

白い容器（頭蓋骨） [に盛られた] 食物においては、肉を避けるべきである。
一切の肉を断ち、一切の経典で認められるものを為す [べきである]。

[2.3.2] 諸尊の觀想

師（阿闍梨）は北に顔を向けて、そこにおいて行を始めるべきである。
[諸尊を] 賞賛し、供養を行い、鈴を鳴らし、その後、
以前言われた諸尊の一团に向かって、觀想を行うべきである。

[2.3.3] 仏陀、諸尊等への帰依文

無限の境界にある仏陀に敬礼する。
真理を照らし出す牟尼に敬礼する。
真理において確立させ、衆生たちを解脱させ、
一切の望みが実りあるものとなるように。
勇気ある方に敬礼する。そして如来たちに敬礼する。
一切の諸尊に敬礼する。法界よ、汝に敬礼する。

[2.3.4] 五護陀羅尼マンダラ諸尊の供養

ドゥルヴァ草とクンダ（ジャスミン）をあわせて、觀想されるべき者（尊格）たちの名前を唱えながら諸仏の額に [飾り]³⁶、そしてまた同様に法界に対しても [飾るべきである]。一度真言を唱え、一度ヨーガ [を行うこと] によって、[諸尊を] 供養するべきである。

[3] 五護陀羅尼の儀軌の効能

[以上の] 一万回の行為によって、一切智者よ、寿命が延びる。
また同様に懇請されるべきマンダラに、どのような方法であれ専心する者は、
王権、王国、そして村落、家畜小屋、庭を [手に入れ]、
悪魔の姿を持つ者、病気、穀物 [の不足による] 飢饉を打ち砕く。
その行為によって、干ばつの恐怖からも守られる。
不可思議な行為による苦しみを与えることを望む者は、
守護の儀軌（五護陀羅尼）によって、自身は (svayam) 必ず守られる。
ヴァータ（風）の性質から生じた病気、ピッタ（熱）の性質から生じた病気、
カパ（＝シュレーシュマ、水）の性質から生じた病気、[諸要素が] 組み合わさ
って生じた病気、起こったすべての病気は消滅し、いかなる時も治癒する。
絶え間のない読誦の実践によって、必ず障害は無くなる。

[以上が] 五護陀羅尼の儀軌である。

-
- 1 [奥山2005: 178] [佐久間2011: 17]
- 2 9種とは、No.194 mahāpratisarāsādhanaṃ、No.195 mahāpratisarāyāḥ sādhanam、No.196 pratisarāsādhanaṃ、No.197 āryamahāmāyūrisādhanaṃ、No.198 āryamahāsāhasrapramarddanisādhanaṃ、No.199 āryamahāmantrānusārīṇisādhanaṃ、No.200 āryamahāsītavatisādhanaṃ、No.201 mahāpañcarakṣāsādhanaṃ、No.206 pañcarakṣāvidhānamである。
- 3 次第については、[Bhattacharya1968:398]、東京大学所蔵梵文写本松波目録No.451～453 *Sādhanaśamuccaya*、National Archives, Kathmandu, No.3-387、及びTTP No.4418を参照し、筆者が作成した。
- 4 清水乞氏によると、「懺悔pāpādesanā」、「発菩提心bodhicitta-」、「回向pariṇāmanā」、「三帰依 trisarana-」等の行為は「七種無上供養⁴」(saptavidhānuttarapūjā)であると述べている。『成就法の花環』No.24、No.56、No.98においては「七種無上供養」と明記された上で（各成就法間で行為の順序や内容に異同があるものの）、7種の行為が記されているという。[清水1977: 66-68]
- マハープラティサラ明妃単独の成就法であるNo.195においては、「七種無上供養」の記述はないものの、「礼拝 (vandanā)、供養 (pūjanā)、懺悔 (pāpādesanā)、福德随喜 (puṇyānumodanā)、三宝帰依 (triśaraṇagamana)、発菩提心 (bodhicittotpāda)、福德回向 (puṇyapariṇāmanā)、許しを得る (kṣamāpana) 等の行為を行う」とあり、行為の内容からみて七種無上供養に該当すると推測される。[園田2014: pp104-105]
- このNo.206においても、「罪の懺悔」から「許しを得る」までの5種の行為をみると七種無上供養に該当すると思われるが、[清水1977: 67-69]の『サーダナマラー』中に表れる七種無上供養の表においてはNo.206について言及されていない。さらに同表によると、4～10種類の七種無上供養が示されており、その順序と内容はそれぞれの成就法によって相違している。また、清水氏の同文献において指摘される「七種無上供養」の中に「許しを得ること」は含まれていない。
- なお、先に述べた礼拝、供養、懺悔等から成る行為をまとめて「七種無上供養」と呼ぶが、花や線香、灯明等を捧げることを一般的に意味する供養 (pūjā) とは区別される。[清水1977: 66-68]
- 5 「大解脱の都 (mahāmokṣapura)」。金剛ターラーの成就法であるNo.97、110において、大日如来を本質 (vairocanaśvabhāvaṃ) とする楼阁 (kūṭāgāraṃ) とある。
- 6 [頼富・下泉1994: 40]
- マハープラティサラ明妃の単独の成就法であるNo.195、No.196、No.206、そしてターラーの成就法であるNo.98における尊格と行者の合一を示唆する場面についての比較は [園田2014:104-105] において述べた。

- 7 これらの尊格は蘊、界、処の本質であるという。
- 8 F: zhes pas rnal 'byor pa 'i gnas dang bdag gnyid bsrung zhing lhag par gnas bar bya'o /
「ヨーガの場所と自分自身を守って特別な場所にせよ」
- 9 Aではpaṃ字となっている。
- 10 この真言は五護陀羅尼の成就法の一つであるSM No.195 「マハープラティサラー成就法」 ([園田2014: 105,112]) にもみられる。他にも、No.97 「金剛ターラー成就法」 ([立川1986: 69])、No.239 「マハーマーヤーの成就法」 ([森2001: 28] [松長1980: 256])、また、ネパールのテキストにも表れるという ([山口2005])。
また、チベット語訳 (F) は'hamが欠けている。
- 11 No.97、110に大日如来の住処とある
- 12 A、B、Dはpaṃ字、C、Eはpraṃ字とある。この種字が後にマハープラティサラー明妃に変化することから、頭文字である後者を採用した。
- 13 体色について、マハープラティサラー明妃はgaura (白)、マハーマントラーヌサーリニー明妃はskula (白) とある。他の明妃の体色との重複を避ける為にもgauraを黄や淡い赤と訳することが可能だが、黄はマハーマユリー明妃の体色と重複する。それ故にgauraの訳として淡い赤が適すると思われた。しかしながらチベットテキストにおいて、マハープラティサラー明妃とマハーマントラーヌサーリニー明妃の体色についてどちらもdkar po (白) と記されている為、今回gauraを白と訳した。なお、マハープラティサラー明妃が単独で説かれている成就法であるSM No.194-196、および五護陀羅尼各明妃が一括して述べられているSM No.201、NPY No.18 「五護陀羅尼マンダラの章」において、マハープラティサラー明妃の体色は黄であり、SM 206と異なる。バッタチャリヤによると、マハープラティサラー明妃は宝生如来の化仏であり、体色は黄であるという。[Bhattacharya1968b: 237, 244]
- 14 bodhivṛkṣo
- 15 F: rin po che 'i me tog 「様々な宝石でできた花」
- 16 マハーサーハスラブラマルダニー明妃が単独で説かれている成就法であるSM No.198、および五護陀羅尼マンダラについて説かれているNPY No.18において、マハーサーハスラブラマルダニー明妃の体色は「白」であり、SM 206と異なる (なお、SM No.201においてはマハーサーハスラブラマルダニー明妃の体色については「前述の通り」とあり、SM No.198のことを指すと推測される)。バッタチャリヤによると、マハーサーハスラブラマルダニー明妃は大日如来の化仏であり、体色は「白」であるという。[Bhattacharya1968b: 206, 217]
- 17 vaṭa学名:Ficus religiosa, Linn.科名:Moraceae.クワ科 和名:バンヤングジュ、インドボダイジュ。中高木もしくは高木。実は食用。インドの聖木の一つ。ヒマラヤの森林地帯等に自生するという。なお、日本のボダイジュ (学名Tilia migueliana, Maxim. 科名Tiliaceaeシナノキ科) とは異なるという [和久2013: 81.95-06]。

- 18 七母神（サブタ・マートリカ）に属する女神は、ブラフマーニー、ルドラーニー、カウマーリー、ヴァイシュナヴィー、ヴァーラーヒー、インドラニー、チャームンダーである。以上にあげた七母神にマハーラクシュミーが加えられると八母神（アシュタ・マートリカ）と呼ばれるという。[立川1990: 60-61]
- 19 仏教を守る竜王。組み合わせとしては、法華経序品等にあられるナンダ（ānanda難陀）、ウパナンダ（跋難陀upananda）、サーガラ（sāgara娑伽羅）、ヴァースキ（vāsuki和修吉）、タクシヤカ（taksaka徳叉迦）、アナヴァタプタ（anavatapta阿那婆達多）、マナスヴィン（manasvin摩那斯）、ウッパラカ（utpalaka優鉢羅）が多いという。[古田、金岡、鎌田、藤井1988:794]
- 20 アーユルヴェーダのトリドーシャ（3つの要素）。この均衡が崩れると病気になる。
- 21 マハーマーユリー明妃が単独で説かれている成就法であるSM No.197、および五護陀羅尼マンドラについて説かれているSM No.201、NPY No.18において、マハーマーユリー明妃の体色は「緑」であり、SM 206と異なる。バッタチャリヤによると、マハーマーユリー明妃は不空成就如来の化仏であり、体色は「緑」であるという。[Bhattacharya1968b: 206, 217]
- 22 aśoka学名: Saraca indica, Linn. 科名: Leguminosae マメ科 和名: ムユウジュ。小木で花卉はなく、萼（うてな）が花卉状で橙色、花糸は赤色をしているという。[和久2013: 1]
- 23 saptaviṣa 詳細については不明。
- 24 立川氏によると、ネパールにおける九曜は日曜、月曜、火曜、水曜、木曜、金曜、土曜、ラーフ（日月食の神、または月が満ちることの神格化）、ケートゥ（隕石の神、または月が欠けることの神格化）によって構成され、天体グループの中で重要視されているという。[立川2004: 134-139]
- 25 マハーマントラーヌサーリニー明妃の体色は「白śkura」とあらわされており、マハープラティサラー明妃の体色と同じである（注10を参照）。また、マハーマントラーヌサーリニー明妃が単独で説かれている成就法であるSM No.199、および五護陀羅尼マンドラについて説かれているSM No.201、NPY No.18において、マハーマントラーヌサーリニー明妃の体色は「青黒」であり、SM 206と異なる。バッタチャリヤによると、マハーサーハスラプラマルダニー明妃は阿闍如来の化仏であり、体色は「青」であるという。[Bhattacharya1968b: 189,200]
- 26 sirīṣ シリーシャsirīṣaと推測される。学名: Albizzia lebbek, Benth. 科名: Leguminosae マメ科 和名: ビルマネムノキ。花は緑色。[和久2013: 66]
- 27 バッタチャリヤ校訂本に「ratnacchaṭā（宝石の塊）」とあるが、「-chatrā（傘）」と注がある。[Bhattacharya1968a : 408]
- 28 バッタチャリヤ校訂本に「karaśa（水瓶）」とあるが、注においてkamalaḥが誤字であることが述べられている。水瓶は一般的に、十二臂のマハーマントラーヌサーリニー明妃の持物の一つであるという。[Bhattacharya1968a: 408]
- 29 マハーシータヴァティー明妃が単独で説かれている成就法であるSM No.200、および五護陀羅

尼マンドラについて説かれているSM No.201、NPY No.18において、マハーシータヴァティー明妃の体色は「赤」であり、SM 206と異なる。バツタチャリヤによると、マハーシータヴァティー明妃は阿弥陀如来の化仏であり、体色は「赤」であるという。[Bhattacharya1968b: 145,153]

- 30 campaka学名：Michelia champaca, Linn. 科名：Magnoliaceaeモクレン科、和名：キンコウボク。花は橙黄色という。[和久2013: 70]
- 31 F: sems can kun la phan don phyir/ dkhi ba'i maṇḍala zlum po bri/
- 32 F: rdul tshon dkar po yis/
- 33 ジャスミンの一種
- 34 インドラやアグニ等、八方位にいる護世神lokapāla ([山口2003:2-3])のシンボルが記されていると考えられる。
- 35 サンスクリットテキストにはācāryyāṅgulimāとあるが、チベット語訳にはsbyin bdag slob dpon gang zhgi gisとあることから、後者を採用した。
- 36 F: d'ur b'a kun da yang dag sgyar/ bsgrub bya 'i ming ni sngags kyis spel/ lha rgams kun nim chod bya zhing/ chos kyi dbyings kyi rang bzhin du/ 「ドウルヴァ草とクンダを合わせ、仏の名前はマントラによって増える。法界の本質において一切の仏たちは供養される」

表1. No.206 「五護陀羅尼成就法」における各明妃の図像的特徴

No.206					
五護陀羅尼					
	マハー プラティサラ	マハー サハスラー プラマルダニー	マハー マーユリー	マハー マントラー ヌサーリニー	マハーシータ ヴァティー
位置		東	南	西	北
体色	白	青黒	黄色	白	緑
顔	三面三眼	四面三眼	三面三眼	三面三眼	三面三眼
正面	白	青黒	黄色	白 (b黒)	緑
右面	青黒 (b黒)	白	青黒 (b黒)	青黒 (b白)	白
背面	黄色	黄色	赤	赤	赤
左面	赤	緑			
臂	八臂	八臂	八臂	十二臂	六臂
右手1	輪	与願印と金剛杵 (b剣)	与願印 (b剣)	転法輪印	施無畏印 (b矢)
右手2	金剛杵	鉤針 (b弓)	宝石の水差し (b輪)	禪定印	金剛杵
右手3	矢	矢 (b鉤針)	輪 (b宝石の水差し)	与願印	矢 (b施無畏印)
右手4	剣	剣 (b与願印と金剛杵)	剣 (b与願印)	施無畏印	
右手5				金剛杵	
右手6				矢	
左手1	金剛杵と羂索	タルジャーニー印と 羂索 (b蓮華の上 にある16の宝石)	乞食の鉢 (b宝石の旗)	転法輪印	
左手2	三叉戟	斧 (b弓)	孔雀の尾羽 (b水差 しの上の二重金剛)	禪定印	
左手3	弓	弓 (b斧)	水差しの上の二重 金剛 (b孔雀の尾 羽)	タルジャーニー印と 羂索	タルジャーニー印と 羂索 (b宝石の旗)
左手4	斧	蓮華の上にある16 の宝石 (bタルジ ャニー印と羂索)	宝石の旗 (b 乞食の鉢)	弓	弓
左手5				宝石の傘 (b宝石棒)	宝石の旗 (bタルジ ャニー印と羂索)
左手6				蓮華マークの水差し	
王冠	仏塔		宝冠	宝冠	如来の化仏
座	金剛結跏趺坐	遊戯坐	結跏趺坐	日輪の上で展右	日輪の上で展右

(上表は、[Bhattacharya1968:398]、東京大学所蔵梵文写本松波目録No.451～453 *Sādhanaśamuccaya*, National Archives, Kathmandu, No.3-387, TTP No.4418を参照し、筆者が作成した。なお、[Bhattacharya1968:398] においてテキストと相違がある持物は、(b)内に記載した)

参考文献

1. 浅井覚超1988「『大随求陀羅尼經』梵藏漢对照研究」『密教文化162号』高野山大学内密教研究会
2. 奥山直司1998「初期密教經典の成立に関する一考察—『マハーマントラヌサーリニー』を中心に—」『インド密教の形成と展開』（松長有慶編）法藏館
3. 大塚伸夫2013『インド初期密教成立過程の研究』春秋社
4. 大塚伸夫2013「初期密教經典の全体像—初期密教の萌芽から展開・確立へ—」『初期密教』（高橋尚夫、木村秀明、野口圭也、大塚伸夫編）春秋社
5. 倉西憲一2013「『パンチャラクシャー』（五つの守護呪）」『初期密教』（高橋尚夫、木村秀明、野口圭也、大塚伸夫編）春秋社
6. 現銀谷史明2008「蘊・界・処について—コラムパ著『全所知の開門』の構成を通して—」『印度学仏教学研究第57巻1号』日本印度学仏教学会
7. 古坂 紘一 1993「大随求陀羅尼における梵藏漢文の比較対照」『インド学密教学研究：宮坂宥勝博士古稀記念論文集通号2』（宮坂宥勝博士古稀記念論文集刊行会）法藏館
8. 佐久間留理子1990「インド密教の図像学的資料（1）：『サーダナ・マラー』における獅子吼觀自在の成就法」『国立民族学博物館研究報告15巻2号』国立民族学博物館
9. 佐久間留理子2011『インド密教の觀自在研究』山喜房佛書林
10. 園田沙弥佳2014「『成就法の花環』におけるマハープラティサラー成就法」『東洋大学大学院紀要第50集』東洋大学大学院
11. 清水乞1977「インドの密教儀礼と造形—サーダナマラーを中心として」『日本仏教学会年報43』大谷大学内日本仏教学会西部事務所
12. 高橋尚夫1987「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現—和訳（完）—」『豊山学報32』1-42
13. 高橋尚夫1988a「金剛界大曼荼羅儀軌 一切金剛出現 第一瑜伽三摩地品 和訳」『密教文化161』151-164
14. 高橋尚夫1988b「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現—余滴—」『豊山学報33』1-58
15. 田久保周誉校訂1972『梵文孔雀明王經』山喜房佛書林
16. 立川武蔵1986「金剛ターラーの觀想法」『論叢仏教美術史 町田甲一先生古稀記念』吉川弘文館
17. 立川武蔵1990『女神たちのインド』せりか書房刊
18. 立川武蔵2004『曼荼羅の神々—仏教のイコノロジー—』ありな書房
19. 田中公明2010『インドにおけるマンダラの成立と発展』春秋社
20. 塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文編1989『梵語仏典の研究 IV密教經典編』平楽寺書店
21. 古田紹欽、金岡秀友、鎌田茂雄、藤井正雄監修1988『仏教大事典』小学館
22. 密教聖典研究会1986「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—

- (I) 『大正大学総合仏教研究所年報第8号』
23. 密教聖典研究会1987「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—
(II) 『大正大学総合仏教研究所年報第9号』
24. 森雅秀2007「『サーダナマーラー』「仏頂尊勝成就法」和訳及びテキスト」『真言密教と日本文化—加藤精一博士古稀記念論文集』 ノンブル
25. 森雅秀1992「マハーマーヤーの成就法」『密教図像第11号』密教図像学会
26. 森雅秀1999「マンダラの形と機能」『シリーズ密教通号2』
27. 山口しのぶ1997「サンヴァラの七字真言—『サーダナ・マーラー』 No.251—」『印度学仏教学研究第46巻第1号』日本印度学仏教学会
28. 山口しのぶ2003「ネパール密教護摩の研究」(平成12年度～平成14年度科学研究補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書)
29. 山口しのぶ2005『ネパール密教儀礼の研究』山喜房佛書林
30. 頼富本宏、下泉全暁1994『密教仏像図典』人文書院
31. 和久博隆2013『新装版仏教植物辞典』国書刊行会
32. 渡辺章悟2012『絵解き般若心経 般若心経の文化的研究』ノンブル社
33. Iwamoto, Y., 1937, Beitrage zur Indologie ; Heft1 mahāsāhasrapramardanī (pañcarakṣā I), Kyoto 尚文堂
34. Iwamoto, Y., 1938, Beitrage zur Indologie ; Heft3 mahāpratisarā (pañcarakṣā II), Kyoto 尚文堂
35. K.R.van kooij, 1978, *Religion in Nepal*, LEIDEN E.J.Brill
36. Bhattacharya, Benoytosh, 1968a, ed. *Sādhnamālā* vol II, Baroda
37. Bhattacharya, Benoytosh, 1968b, *The Indian Buddhist Iconography*, Calcutta
38. Lokesh Chandra, 2003, *Dictionary of Buddhist Iconography Volume 7,9*, International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan, New Delhi

Pañcarakṣāsādhana in the *Sādhnamālā*

SONODA, Sayaka

Sādhnamālā (SM) is one of the texts related to the visualization of images of Buddhist deities, which was compiled by Abhayākara Gupta in the eleventh or twelfth century. It contains nine kinds of sādhanas of the goddess Pañcarakṣā. Among these, No.194, 195, and 196 describe the visualization of Mahāpratisarā apart from the other four goddesses. No.201 and 206 describe all the five goddesses of Pañcarakṣā.

Especially, No. 206 describes the sādhanā of Pañcarakṣā maṇḍala in detail. In this sādhanā, the ascetic meditates on the Pañcarakṣā maṇḍala and unites himself with it in the first half of the text. Afterwards, the ascetic draws a maṇḍala for the benefit of all living beings. This paper includes a Japanese translation of SM No.206.

When translating, I used an Sanskrit edition, and referred to some Sanskrit manuscripts and a Tibetan translation.

Keywords:

Tantric Buddhism, *Sādhnamālā*, Pañcarakṣā